

〔査読付論文〕

PBL 型講義における社会人基礎力の変化に関する研究*

河村 裕次^{*2}, 田中 秀和^{*2}, 古野 愛子^{*2}, 鍋田 耕作^{*2}, 美濃 祐子^{*3}, 林 孝和^{*4}

A Study on Changes in Basic Skills for Working People in PBL-Type Lectures

Yuji KAWAMURA^{*2}, Hidekazu TANAKA^{*2}, Aiko KONO^{*2},
Kousaku NABETA^{*2}, Yuko MINO^{*3}, Takakazu HAYASHI^{*4}

^{*2}, ^{*3}, ^{*4}Department of Business and Economics, School of Business and Economics, Nippon Bunri University

Abstract

In this study, we examined the effects of PBL lectures on the basic skills of working people by having second-year students in the Child and Welfare Management Course of the School of Business and Economics as participants and conducting self-evaluations on basic skills of working people. A comparison was conducted between the 12 competence components of such skills before and after the PBL lectures. The self-assessment of the students decreased in most of the competence components after the PBL lectures. Examining the reasons for the decline in self-evaluation led to the conclusion that the PBL lectures provided an opportunity for the students to realize the discrepancy between their self-perception and their self-evolution. In addition, it was suggested through this study that the phenomenon of “relativization,” in which students’ self-perceptions were overturned during the process of establishing their own identities, had occurred.

キーワード：PBL, 社会人基礎力, アクティブラーニング, 自己評価

Keywords : PBL, basic skills for working adults, active learning, self-evaluation

1 問題と目的

2006年に経済産業省から、社会人になる前の学生だけ

でなく、幅広い年齢層のビジネスパーソンにとって必要な「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、3つの能力と12の能力要素で構成される「社会人基礎力」が提唱された。「社会

*2022年4月20日受理

*2 日本文理大学経営経済学部経営経済学科 准教授

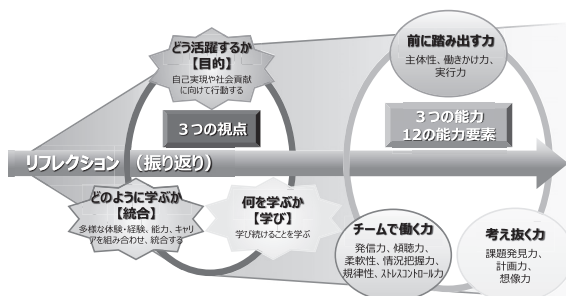
*3 日本文理大学経営経済学部経営経済学科 技術員

*4 日本文理大学経営経済学部経営経済学科 助教

人基礎力」が求められる背景には、ビジネス・教育をめぐる国内外の環境変化があり、産業界のニーズに応えるための能力を学校教育のなかで育むという経済産業省の目的がある（中井2021：35～36）。

さらに、人生100年時代構想会議中間報告によると、「『日本では、2007年に生まれた子供の半数が107歳より長く生きる』と推計」（人生100年時代構想会議2017：1）されており、現在日本は人生100年時代を迎えている。そのため、「環境やライフステージに応じて、常に学び続け、自らを振り返りながら、必要なスキルをアップデートしていく」ことが求められるようになった。「人生100年時代」を踏まえ、経済産業省は、2018年にこれまでの「社会人基礎力」を「人生100年時代の社会人基礎力」とし、個人の企業・組織・社会との関わりが、これまで以上に長くなる中で、ライフステージの各段階で活躍し続けるために求められる力と再定義した（図1）。

図1 人生100年時代の社会人基礎力



（出典：経済産業省（2018）「人生100年時代の社会人基礎力」説明資料）

「社会人基礎力」は、3つの能力／12の能力要素において構成をされている。これらの能力・能力要素について、「『人生100年時代の社会人基礎力』説明資料」において、以下の通り、説明がなされている（図2）。

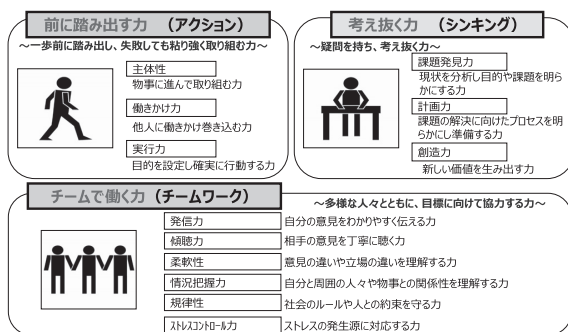
（1）前に踏み出す力（アクション）：一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力。この能力における能力要素は、①主体性（物事に進んで取り組む力）、②働きかけ力（他人に働きかけ巻き込む力）、③実行力（目的を設定し確実に実行する力）があり、指示待ちにならず、一人称で物事を捉え、自ら行動できるようにする事が求められる。

（2）考え抜く力（シンキング）：疑問を持ち、考え抜く力。この能力における能力要素は、①課題発見力（現状を分析し目的や課題を明らかにする力）、②計画力（課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力）、

③創造力（新しい価値を生み出す力）があり、論理的に答えを出すこと以上に、自ら課題提起し、解決のためのシナリオを描く、自律的な思考力が求められる。

（3）チームで働く力（チームワーク）：多様な人々とともに、目標に向けて協力する力。この能力における能力要素は、①発信力（自分の意見をわかりやすく伝える力）、②傾聴力（相手の意見を丁寧に聞く力）、③柔軟性（意見の違いや立場の違いを理解する力）、④状況把握力（自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する能力）、⑤規律性（社会のルールや人との約束を守る力）、⑥ストレスコントロール力（ストレスの発生源に対応する力）であり、グループ内の協調性だけに留まらず、多様な人々の繋がりや協働を生み出す力が求められる。

図2 社会人基礎力の3つの能力と12の能力要素



（出典：経済産業省（2018）「人生100年時代の社会人基礎力」説明資料）

これらの能力において、学生は、現時点で自分が達成していると思う点、また不足していると思う点などを自己評価し、不足している点については、今後不足を補うために必要なスキルは何であるのかを把握することが求められる。さらにそれらのスキルを身につけるためにどのようなアクションを起こす必要があるのかを考え行動できる力を養っていくことが重要である。また、自分ができていると思っていても、周りからの評価は異なる時もあるため、時には周囲から客観的な意見を求めることも必要である。第三者からの客観的な意見を参考に、自らの課題を設定し、自分の不足している点を補うための必要なアクションを自ら考え主体性をもって取り組んでいくことができる力が必要である。

本学部のこども・福祉マネジメントコースでは、ゼミナール活動を通して、この「社会人基礎力」を養うためにPBL（課題解決型学習）型講義を取り入れている。PBLとは、自ら問題を見つけ、その解決方法を考える

過程を通して、課題発見や課題解決能力を養っていく教育手法である。ゼミナールでは、PBL 型講義を通して、社会人基礎力をバランスよく高めていけるよう講義設計を行い、各学年において段階的に能力向上できるよう取り組みを行っている。

2 研究方法

(1) 研究目的

本研究の目的は、本学部こども・福祉マネジメントコース所属2年生を対象に、コース合同で実施している「ゼミナールⅡA」（以下、「ゼミⅡA」）でのPBL型講義を通じた社会人基礎力に対する学生の自己理解の変化についての検証を行うことである。

(2) ゼミⅡAの目的・内容

2021年度前期「ゼミⅡA」は、本学部こども・福祉マネジメントコース4ゼミ合同で開講された。

当該コースにおける人材育成目標は、「少子高齢化社会に求められる人材を育てる」ことである。より具体的には、以下のように整理される。

- 1) 子ども、障害者や高齢者などの幅広い視野から福祉のあり方を学ぶことによって、地域共生のために必要となる知識・スキル・マネジメント力を養うこと。
- 2) 「子ども」、「障害者」、「高齢者」に加え、「ビジネス」など様々な視点から、つながりある地域社会の実現に貢献できる人材を育成すること。

上記を通して、社会福祉の視点から様々な課題解決ができる人材を養成することが当該コースにおける目標である。このような人材を育成するため、「ゼミⅡA」では、以下の到達目標を掲げている。

- 1) 地域社会で起きている課題について関心を示すことができる。
- 2) チームで課題解決に向けて取り組む姿勢を示すことができる。
- 3) PBLの過程について理解できている。
- 4) 課題解決の方策について理解できている。
- 5) 自分自身で調べた、考えた事項について他のメンバーに伝えることができる。
- 6) チーム活動の成果について適切にプレゼンテーションすることができる。
- 7) 他のメンバーの考え、意見を理解し、自らの立場

に基づいた意見を述べることができる。

各回における講義の概要は表1の通りである。なお、新型コロナウイルス感染症対策のため、当該科目は、対面とオンラインの併用にて実施された。

「ゼミⅡA」では、「1問題と目的」にもあるように、PBL活動の手法を活用しながら、上記のように地域社会で生じている様々な課題解決策の提案について、グループ活動を中心に実施された。今年度のPBLのテーマは、「大分市がどのような町であれば住み続けたいか？」である。各回における講義展開は、各回の最初に教員から当該回における授業内容を説明し、その後学生たちがグループで議論し、課題の達成を目指すものである。教員はあくまでも側面的に学生をサポートする立場にあり、活動主体は学生に委ねられている。

各回の授業展開は、第1回から第3回で社会人基礎力や卒業後に求められる能力について教員が言及をした。第4回では、学生に身近な存在であるポテトチップを題材に、なぜ種類によって袋の中に含まれているポテトチップの量が異なるのかをグループで話し合い、その理由を考察した。第5回ならびに第6回では、大分県を訪れる観光客に対する旅行プランをグループで考える時間をもった。これらの取り組みは、上記のPBLを実施するうえで導入部分にあたる。学生たちは、これらの課題から与えられた課題に対する問いの立て方や解の導き方を学習した。その後のPBLでは、まず各回のはじめに教員から当該回においてグループで行うべきPBLの内容について説明を実施し、そのあと学生はグループごとに活動を行った。

表1 2021年度 前期 日本文理大学 こども・福祉マネジメントコース「ゼミⅡA」授業概要

回数	概要	
1	オリエンテーション	
2	社会人基礎力に関する動画を視聴し、レポートにまとめる	
3	卒業後に求められる能力とはどのようなものか、PBLの説明	
4	導入1	グループワーク（ポテトチップスを題材として）
5	導入2	個人課題（県外旅行者を対象とした旅行プランの作成）
6	導入3	前回の振り返りと旅行プラン計画の再立案
7	PBL 1	方向性の決定と課題の検討
8	PBL 2	情報収集計画の作成1
9	PBL 3	収集した情報の共有・分析、課題の選別・新たな課題の抽出1
10	PBL 4	情報収集計画の作成2
11	PBL 5	収集した情報の共有・分析、課題の選別・新たな課題の抽出2
12	PBL 6	解決策の検討
13	PBL 7	解決策の検討2
14	PBL 8	PBLのまとめ
15	授業全体の振り返り	

社会人基礎力
調査 1回目

社会人基礎力
調査 2回目

（著者作成）

今日における大学教育は、教員が学生に何を教えたかではなく、その結果、学生は何を学んだか、すなわち学習の成果が重視されるようになってきている。それは知識のみならず、論理的思考や問題解決、コミュニケーション能力などが含まれている（小野・松下・斎藤2020：1）。当該科目で着目した概念は、上述の「社会人基礎力」である。「社会人基礎力」の育成のために導入されている教育手法はアクティブラーニングであり

（中津川2020：54）、当該科目もその手法を取り入れている。「ゼミⅡA」での講義展開は、教員が学生に課題を提示し、回答を教示するものではない。それは、ときには教員が学生より知識と経験を有していても万全な解決策を見出せないという事実を学生に開示することが、学生にとって自分の失敗を次の学習の好機としてとらえる新しいものの見方を自分のものにする上でモデルとなり得るような講義展開である（新野・糸井・清野・大森・岡2020：45－52）。「ゼミⅡA」では、学生も教員もともに悩みながら、課題解決策を探っていく。

なお、学生のなかには、必ずしも最初から講義に対して意欲的に取り組めない者もいる。しかし、講義での学びを通して、徐々に意欲が喚起され、主体的な学習者となっていく中動態の概念（田中2021：33－47）も参考にしながら、講義回数を重ねる中での学生の成長を願い、講義を展開した。

中動態とは、能動／受動とは異なる概念であり、「ゼミⅡA」では授業開始当初はPBLに対して意欲的に取り組むことができなかった学生が、授業を重ねていくなかで徐々に主体的に学習に取り組んでいくことをイメージしている。「ゼミⅡA」での中動態の概念とは、当該活動に関心が薄くとも、周囲の者とのやりとりを観察したり、徐々に議論を深めていくなかで学生の行動に変化が生じる可能性を探るものである。

（3）調査概要

- 1）調査対象：ゼミⅡAの履修学生（2年生、56名）
- 2）調査期間：1回目 ゼミⅡA開始時 2021年4月
2回目 ゼミⅡA終了時 2021年7月
- 3）調査方法：アンケート調査は、アンケートの趣旨を口頭で説明した後、Googleフォームを用い、講義時間内に回答を求めた。
- 4）調査項目：社会人基礎力調査として、経済産業省の社会人基礎力基準票中の「発揮できた例」を尺度（5件法）として使用した。質問項目については、表2の通りである。なお実際にアンケートを行う際には質問項目をランダムに配置し行った。また、2回目において、「PBLを通して、今後継続したいこと」、「PBLを通して、今後改善したいこと」について自由記述での回答を求めた。

表2 質問項目一覧

3つの能力	12の能力要素	質問項目
前に踏み出す力	主体性	1 自分がやるべきことは何かを見極め、自発的に取り組むことができる
		2 自分の強み・弱みを把握し、困難なことでも自信を持って取り組むことができる
		3 自分なりに判断し、他者に流されず行動できる
	働きかけ力	1 相手を納得させるために、協力することの必然性(意義、理由、内容など)を伝えることができる
		2 状況に応じて効果的に巻き込むための手段を活用することができる
		3 周囲の人を動かして目標を達成するパワーを持って働きかけることができる
	実行力	1 小さな成果に喜びを感じ、目標達成に向かって粘り強く取り組み続けることができる
		2 失敗を怖れずに、とにかくやってみようとする果敢さを持って、取り組むことができる
		3 強い意志を持ち、困難な状況から逃げずに取り組み続けることができる
考え抜く力	課題発見力	1 成果のイメージを明確にして、その実現のために現段階でなすべきことを的確に把握できる
		2 現状を正しく認識するための情報収集や分析ができる
		3 課題を明らかにするために、他者の意見を積極的に求めることができる
	計画力	1 作業のプロセスを明らかにして優先順位をつけ、実現性の高い計画を立てることができる
		2 常に計画と進捗状況の違いに留意することができる
		3 進捗状況や不測の事態に合わせて、柔軟に計画を修正することができる
	創造力	1 複数のもの(もの、考え方、技術等)を組み合わせ、新しいものを作り出すことができる
		2 従来の常識や発想を転換し、新しいものや解決策を作り出すことができる
		3 成功イメージを常に意識しながら、新しいものを生み出すためのヒントを探ることができる
チームで働く力	発信力	1 事例や客観的なデータ等を用いて、具体的にわかりやすく伝えることができる
		2 聞き手がどのような情報を求めているかを理解して伝えることができる
		3 話そうとすることを自分なりに十分に理解して伝えることができる
	傾聴力	1 内容の確認や質問等を行いながら、相手の意見を正確に理解することができる
		2 相槌や共感等により、相手に話しやすい状況を作ることができる
		3 相手の話を素直に聞くことができる
	柔軟性	1 自分の意見を持ちながら、他人の良い意見も共感を持って受け入れることができる
		2 相手がなぜそのように考えるかを、相手の気持ちになって理解することができる
		3 立場の異なる相手の背景や事情を理解することができる
	状況把握力	1 周囲から期待されている自分の役割を把握して、行動することができる
		2 自分にできること・他人ができることを的確に判断して行動することができる
		3 周囲の人の状況(人間関係、忙しさ等)に配慮して、良い方向へ向かうよう行動することができる
	規律性	1 相手に迷惑をかけないよう、最低限守らなければならないルールや約束・マナーを理解することができる
		2 相手に迷惑をかけたとき、適切な行動を取ることができる
		3 規律や礼儀が特に求められる場面では、粗相のないように正しくふるまうことができる
	ストレスコントロール力	1 ストレスの原因を見つけて、自力で、または他人の力を借りてでも取り除くことができる
		2 ストレスを感じることは一過性、または当然のことと考え、重く受け止めすぎないようにすることができる
		3 他人に相談したり、別のことに取組んだりする等により、ストレスを一時的に緩和できる

(著者作成)

3 調査結果

ゼミⅡA 開始時とゼミⅡA 終了時での社会人基礎力の各尺度の自己評価の平均値については、表3の通りである。

(1) 前に踏み出す力

前に踏み出す力について、ゼミⅡA 開始時とゼミⅡA 終了時での変化を比較すると、『実行力』のうち、「強い意志を持ち、困難な状況から逃げずに取り組み続けることができる」($t[44]=2.044, p<.05$)という設問において、ゼミⅡA 終了時の自己評価の平均値が有意に低い結果(-0.24)となった。

また、統計上有意味な差を確認することはできなかったが、『主体性』のうち、「自分の強み・弱みを把握し、困難なことでも自信を持って取り組むことができる」(-0.13)、『働きかけ力』のうち、「状況に応じて効果的に巻き込むための手段を活用することができる」(-0.16)、『実行力』のうち「小さな成果に喜びを感じ、目標達成に向かって粘り強く取り組み続けることができる」(-0.20)及び「失敗を怖れずに、とにかくやってみようとする果敢さを持って、取り組むことができる」(-0.13)において、ゼミⅡA 終了時の自己評価の平均値が低くなる傾向(-0.1以上の差)が見られた。

(2) 考え抜く力

考え抜く力の各項目について、ゼミⅡA 開始時とゼミⅡA 終了時で有意な差を確認することはできなかった。

また、統計上有意味な差を確認することはできなかったが、『計画力』のうち、「常に計画と進捗状況の違いに留意することができる」(+0.16)、『創造力』のうち「従来の常識や発想を転換し、新しいものや解決策を作り出すことができる」(+0.18)及び「成功イメージを常に意識しながら、新しいものを生み出すためのヒントを探すことができる」(+0.11)において、ゼミⅡA 終了時の自己評価の平均値が高くなる傾向(+0.1以上の差)が見られた。一方で、『課題発見力』のうち「成果のイメージを明確にして、その実現のために現段階でなすべきことを的確に把握できる」(-0.20)及び「課題を明らかにするために、他者の意見を積極的に求めることができる」(-0.20)において、ゼミⅡA 終了時の自己評価の平均値が低くなる傾向(-0.1以上の差)が見られた。

(3) チームで働く力

チームで働く力の各項目について、ゼミⅡA 開始時とゼミⅡA 終了時で有意な差を確認することはできなかった。

また、統計上有意味な差を確認することはできなかったが、『発信力』のうち、「聞き手がどのような情報を求めているかを理解して伝えることができる」(-0.11)及び「話そうとすることを自分なりに十分に理解して伝えることができる」(-0.11)、『傾聴力』のうち、「内容の確認や質問等を行いながら、相手の意見を正確に理解することができる」(-0.16)、『状況把握力』のうち、「周囲の人の状況(人間関係、忙しさ等)に配慮して、良い方向へ向かうよう行動することができる」(-0.11)、『規律性』のうち、「規律や礼儀が特に求められる場面では、粗相のないように正しくふるまうことができる」(-0.11)、『ストレスコントロール力』のうち、「ストレスの原因を見つけて、自力で、または他人の力を借りてでも取り除くことができる」(-0.24)において、ゼミⅡA 終了時の自己評価の平均値が低くなる傾向(-0.1以上の差)が見られた。

表3 ゼミⅡA開始時とゼミⅡA終了時の比較

3つの能力	12の能力要素	各項目	<i>n</i>	ゼミ開始	ゼミ終了	開始－終了	有意水準
前に踏み出す力	主体性	自分がやるべきことは何かを見極め、自発的に取り組むことができる	45	3.62	3.69	0.07	
		自分の強み・弱みを把握し、困難なことでも自信を持って取り組むことができる	45	3.58	3.44	-0.13	
		自分なりに判断し、他者に流されず行動できる	45	3.67	3.76	0.09	
	働きかけ力	相手を納得させるために、協力することの必然性(意義、理由、内容など)を伝えることができる	45	3.47	3.44	-0.02	
		状況に応じて効果的に巻き込むための手段を活用することができる	45	3.42	3.27	-0.16	
		周囲の人を動かして目標を達成するパワーを持って働きかけることができる	45	3.24	3.24	0.00	
	実行力	小さな成果に喜びを感じ、目標達成に向かって粘り強く取り組み続けることができる	45	3.87	3.67	-0.20	
		失敗を怖れずに、とにかくやってみようとする果敢さを持って、取り組むことができる	45	3.51	3.38	-0.13	
		強い意志を持ち、困難な状況から逃げずに取り組み続けることができる	45	3.67	3.42	-0.24	*
考え抜く力	課題発見力	成果のイメージを明確にして、その実現のために現段階でなすべきことを的確に把握できる	45	3.58	3.38	-0.20	
		現状を正しく認識するための情報収集や分析ができる	45	3.67	3.64	-0.02	
		課題を明らかにするために、他者の意見を積極的に求めることができる	45	3.84	3.64	-0.20	
	計画力	作業のプロセスを明らかにして優先順位をつけ、実現性の高い計画を立てることができる	45	3.42	3.38	-0.04	
		常に計画と進捗状況の違いに留意することができる	45	3.38	3.53	0.16	
		進捗状況や不測の事態に合わせて、柔軟に計画を修正することができる	45	3.60	3.51	-0.09	
	創造力	複数のもの(もの、考え方、技術等)を組み合わせて、新しいものを作り出すことができる	45	3.22	3.22	0.00	
		従来の常識や発想を転換し、新しいものや解決策を作り出すことができる	45	3.44	3.62	0.18	
		成功イメージを常に意識しながら、新しいものを生み出すためのヒントを探すことができる	45	3.49	3.60	0.11	
チームで働く力	発信力	事例や客観的なデータ等を用いて、具体的にわかりやすく伝えることができる	45	3.44	3.38	-0.07	
		聞き手がどのような情報を求めているかを理解して伝えることができる	45	3.56	3.44	-0.11	
		話そうとすることを自分なりに十分に理解して伝えることができる	45	3.47	3.36	-0.11	
	傾聴力	内容の確認や質問等を行いながら、相手の意見を正確に理解することができる	45	3.91	3.76	-0.16	
		相槌や共感等により、相手に話しやすい状況を作ることができる	45	3.96	4.04	0.09	
		相手の話を素直に聞くことができる	45	4.29	4.31	0.02	
	柔軟性	自分の意見を持ちながら、他人の良い意見も共感を持って受け入れることができる	45	4.04	4.11	0.07	
		相手がなぜそう考えるかを、相手の気持ちになって理解することができる	45	3.98	4.04	0.07	
		立場の異なる相手の背景や事情を理解することができる	45	3.82	3.80	-0.02	
	状況把握力	周囲から期待されている自分の役割を把握して、行動することができる	45	3.84	3.76	-0.09	
		自分にできること・他人ができることを的確に判断して行動することができる	45	3.89	3.84	-0.04	
		周囲の人の状況(人間関係、忙しさ等)に配慮して、良い方向へ向かうように行動することができる	45	3.73	3.62	-0.11	
	規律性	相手に迷惑をかけないよう、最低限守らなければならないルールや約束・マナーを理解することができる	45	4.40	4.42	0.02	
		相手に迷惑をかけたとき、適切な行動を取ることができる	45	4.09	4.16	0.07	
		規律や礼儀が特に求められる場面では、粗相のないように正しくふるまうことができる	45	4.11	4.00	-0.11	
	ストレスコントロール力	ストレスの原因を見つけて、自力で、または他人の力を借りてでも取り除くことができる	45	3.58	3.33	-0.24	
		ストレスを感じることは一過性、または当然のことと考え、重く受け止めすぎないようにすることができる	45	3.62	3.62	0.00	
		他人に相談したり、別のことに取組んだりする等により、ストレスを一時的に緩和できる	45	3.36	3.33	-0.02	

*** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

(著者作成)

4 考察

今回のゼミⅡA 開始時とゼミⅡA 終了時の学生の社会人基礎力の変化を比較すると、多くの項目において開始時に比べ、終了時の自己評価が下がる結果となった。一方で、社会人基礎力の育成に関する多くの先行研究において、活動（地域連携教育やPBL等）を通して社会人基礎力が伸長することが明らかにされている。

本研究において、有意差は確認できなかったものの、開始時と終了時の自己評価で上昇をした、『計画力』（常に計画と進捗状況の違いに留意することができる）については、ゼミⅡA 講義内で最終成果（PBL 企画提案）の作成を求めるとともに、最終成果物の完成に向け、毎講義開始時に講義時間、講義時間後（次回講義まで）に何をするのかについて各チームで確認をしてきた。ゼミⅡA 終了時の自由記述（今後継続をしていきたいことについて）の「スケジュールを考えながら取り組むことができ、計画性を伸ばすことができた」という回答のように、示されたスケジュールと自分たちの置かれている状況の違いについて意識することが自己評価の上昇につながったのではないかと考えられる。

さらに、『創造力』（従来の常識や発想を転換し、新しいものや解決策を作りだすことができる・成功のイメージを常に意識しながら、新しいものを生み出すためのヒントを探すことができる）については、正解のない課題に対して、これまで修得をしてきた様々な知識等を活用し、解決策のヒントをチームで出し合い、それらを解決策として形にしていく、PBL 型講義という教育手法を用いた一定の効果が表れたと考えられる。PBL とは、「複雑な現実の問題に対する探求とその解決を中心に据えて集中して取り組む、体験的な学びであり、具体的な課題について洞察、観察、対話、交渉、反省、学習の再構築という過程」（新野・糸井ら2019：8）である。自由記述（今後継続をしていきたいことについて）においても「深く考えることができた」、「課題解決をするために、たくさんのことを調べたり考えたりすることができた」という回答のように、PBL 型講義の過程を経たことにより、自己評価が上昇したのではないかと考えられる。

その一方で、社会人基礎力の多くの項目において、ゼミⅡA 開始時とゼミⅡA 終了時における自己評価の低下が確認された。その要因について以下の2点が考えられる。

まず1つ目として、PBL 型講義に取り組むことによ

り、ゼミⅡA 開始時・終了時の自己認識のギャップに気づく契機となったことがあげられる。

佐々木・葛谷（2019：149－150）は保育者養成における社会人基礎力の獲得について研究を行い、グループ討議前後での社会人基礎力の自己評価について検討をしている。その中で、グループ討議後に自己評価のうち、主体性、働きかけ力、実行力、発信力、状況把握力、計画力といった「自ら把握し、自ら考えて行動するという側面」の自己評価が下落していることを明らかにしている。その要因として、学生ができたつもりになっていたことや主体的かつ計画的に進められなかったことに気づいた学生の存在やグループ討議によってそれぞれの能力の重要性の認識が深まり、自己評価がさらに厳しくなったことを指摘している。本研究においても、『計画力』を除いた、『主体性』、『働きかけ力』、『実行力』、『発信力』、『状況把握力』がゼミⅡA 終了時では自己評価が低下をしている。ゼミⅡA 終了時の自由記述（今後改善をしていきたいことについて）において、「自分」という言葉が多く用いられ、主体的関わりが不足していたことに気づいた様子がうかがえる。さらに、「周りに上手く働きかけを行い、役割分担をすることができなかった」、「周りへの働きかけを積極的に行いたい」、「自分の意見をはっきりと伝えきれない場面が多くあった」、「自分の言葉でうまく伝えることができなかった」という回答のように、ゼミⅡA 開始時では自分自身の中ではできている（身についている）と認識していたものが、チームでの与えられた課題について情報を収集・分析し、解決策を考えていく過程の中で、できていると自己認識していた能力が実際にはできていないということに気づき、ゼミⅡA 開始時の自己認識とゼミⅡA 終了時の自己認識にギャップが生じたのではないかと考えられる。さらに、佐々木・葛谷（2020：150）が指摘しているように、個人活動ではなく、チームで協働したことにより、課題解決を考えるなかでそれぞれの能力の重要性・必要性の認識がゼミⅡA 開始時より高まったのではないかと考えられる。

2つ目として、アイデンティティ（自我同一性）を確立していく中での要因があげられる。

奥田・深田（2019：17－19）は看護学生の社会人基礎力の経年的変化とその影響について調査研究を行い、2年次の社会人基礎力の総得点が最も低く、その後4年次にかけて高まる傾向があることを明らかにしている。さらに、金子（2015：3）は、大学生の多くが占める青年期について、それまでの環境とは全く異なる「不連続」な状況を経て、新しいアイデンティティを獲得し、オト

ナへと成長する時期であり、「不連続」な状況の中では、例えば新しい知識を得たり、他人の考えに触れたりする中で、それまで自分が信じてきたこと（「思い込み」）が根底から覆される「相対化」が起こり、その上で、自己を再び「統合」して新たなアイデンティティを作っていくと述べている。本研究が対象とした大学2年生も青年期に属しており、これまでの小学・中学・高校では経験する機会の少なかった、正解のない課題について、新たに答えを創出していくという状況の中で、これまでの経験で培い、できている（身につけている）と思っていた能力が、新たな環境におけるチーム活動を通じてそれらの能力についての自己認識が覆される「相対化」が起きたのではないかと推測される。

これら自己評価の低下に影響を与えたと考える2要因については、自分自身の現状に気づき、新たな自分というものを確立していくためのものであり、本研究において社会人基礎力の自己評価は低下したものの、成長・発達の点からみると肯定的に捉えていくことができるのではないだろうか。ひいては、福祉人材として重要視される自己覚知につながるものと考えられる。

最後に今後の課題について触れておきたい。社会人基礎力について、宇野（2021：45）は、大学生の児童虐待防止啓発運動前後で社会人基礎力得点が高くなったり、低くなったりと一貫性がなく、得点が個人内で変動することを示し、社会人基礎力は変化する可能性があることを指摘している。つまり社会人基礎力は一定のものではなく、意識の有無によって変化していくものである。そのため、定期的に各学生の社会人基礎力の自己評価について継続的に調査を行っていくことが大切であろう。

また、社会人基礎力の育成の手引きにおいて、社会人基礎力は、それだけを単独に高めるというのではなく、よい経験や活動をすることによって循環的に向上するものと指摘している（経済産業省2010：3）。本研究ではゼミⅡAでのPBL型講義に焦点をあて比較検討を行ってきたが、学生を取り巻く様々な要素（アルバイト、部活動、交友関係等）が与える影響についても見ていくことが求められる。

さらに、社会人基礎力はただ伸ばせばよいというものではなく、「社会人として活躍するために必要な能力の一面」（経済産業省2010：3）を踏まえ、社会が求める能力を目標（ゴール）として育成をしていかなければならない。そのため社会が求める社会人基礎力と学生の自己認識・自己評価との比較検討を行っていくことが必要であろう。これらについては、稿をあらためて検討をしていきたい。

文献

- 宇野耕司（2021）「大学生による児童虐待防止啓発運動の実践報告－社会人基礎力の育成に有効か－」『目白大学高等教育研究』（27），39-47
- 奥田玲子・深田美香（2019）「看護学生の社会人基礎力の経年的変化と影響を及ぼす経験要因」『米子医学雑誌』70（1-3），13-24
- 小野和宏・松下佳代・斎藤有吾（2020）「PBLカリキュラムにおける長期的な学習成果の直接評価－新潟大学歯学部でのパフォーマンス評価の縦断研究にもとづいて－」『京都大学高等教育研究』26，1-12
- 金子元久（2015）「学生を成長させる大学とは」『Guideline2015年特別号』（河合塾）3-5
- 経済産業省（2010）『社会人基礎力 育成の手引き－日本の将来を託す若者を育てるために－』毎日新聞
- 経済産業省（2018）「人生100年時代の社会人基礎力 説明資料」
- 経済産業省（2019）「社会人基礎力」（<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>, 2021. 10. 18）
- 経済産業省人材政策室（2018）『「人生100年時代の社会人基礎力」と「リカレント教育」について」
- 佐々木友里・葛谷潔昭（2020）「保育者養成校におけるオペレッタ創作による非認知能力（社会人基礎力）獲得の学生評価のグループ討議後の変容について」『豊岡短期大学論集』（16），139-151
- 田中優（2021）「中動態としての地域志向型 PBL に関する考察」『日本福祉大学全学教育センター紀要』9, 33-47
- 内閣官房 人生100年時代構想推進室（2017）『人生100年時代構想会議』
- 中井咲貴子（2021）「社会人基礎力の段階的伸長に関する実証分析：PBL型インターンシップ実施校への調査から」『佛教大学大学院紀要教育学研究科篇』（49），35-46
- 中津川智美（2020）「学生による地域貢献活動に関する意識調査－大学との関わりと社会人基礎力に着目して－」『常葉大学経営学部紀要』8（1），53-59
- 新野由子・糸井和佳・清野純子・大森美保・岡潤子（2020）「学生の社会人基礎力の現状と教育方法の検討－看護学科FD研修会を通して－」『帝京科学大学紀要』16, 45-52
- 新野由子・糸井和佳・清野純子・大森美保・福井郁子・岡潤子（2019）「看護学士課程1年生の社会人基礎

力の変化 第1報－初年次教育の基礎ゼミⅡAを
通して－」『帝京科学大学紀要』15, 1-9
